

生徒自らが考えることを中心とした

国語学習の実践が必要ではないか

田 尻 寔

一、はじめに

毎日の授業実践の中で、強く感じられることは、「生徒自らが考える」というあたりまえのことが、ずいぶんむずかしくなっているということである。そこには、指導者の授業組織の問題も横たわっている。私は、今は一年生の授業を持っていないので、新課程の「国語Ⅰ」を直接担当してはいないが、日頃最も痛切に感じている、「どのようにして生徒自らが考える授業を組み立てていくか」という課題を国語Ⅰの中で達成する方途をもとめて、個人の行った実践をふまえながら、提案や問題提起を行っていききたい。

二、基本的諸問題

(1)、生徒の学習状況の実態

ある社会科の先生が、こんなことを言われた。「私が源平の話を、おもしろい話だと思って話してやっているのに、自分が話し始めると、生徒の方が勝手に彼らの話を始める。だからもう、彼らを静かにさせるために、板書を二枚か三枚書くんだ。そうすれば、静かに書いてくれる。」「二枚か三枚」というのはいくらか冗談が入っているかと思われるが、こちらが話し始めると自分たちのおしゃべりを

始めるという傾向は、確かに強く感じられる。

ものを読んでいる時に、あるいは他人の話を聞いている時に、それを自分なりに考えながら読んだり聞いたりするということが、どうも苦手なのではないかと思う。講演会などでも、話し手におかまいなしに隣りどうし話をするというようなことがよく見られ、先生方がその生徒のところまでいって、ゴツンと頭をたたかなくてはならないというような現実もある。したがって、自分自身で考える、自分の意見を持ってそれを発表していく、というようなことになると、なおさら困難を感じるらしく、教科書の中の一文を抜き出して答えとしてみたりすることが多く見られる。

生徒の勉強のしかたを見ると、教師が黒板に書くことを、その場では何も考えずに機械的に書き写して、試験の少し前になったらそれを覚えこむ、暗記する、ということをやっているようである。こういう状況を克服して、自分で考えていく、という方向の授業を何とか構築していくことはできないだろうか。

(2)、表現と理解の関連

理解というものと表現というものをつなこうとする中で、生徒自身の中にことばというものがいかに少ないかという実態を強く感じている。彼ら自身が、書くときにことばがうまく出てこない、という感

じを強くもっている。自分のことはでものを書く、そのことばというものを、もう少し授業の中で意識的に配慮していかなくてはならない。その根底に、自分で考えていく、という視点が必要である。

生徒自身が、教材や学習の目的に対して感動したり共鳴したりして、問題意識を持つことができれば、自ら意欲的にその問題について、あるいは作品について、自分なりに受けとめ、表現していくということができるとあるが、そのような状況にもっていけないところに、指導者としての私たち自身のまささがあるように思われる。自ら考えるという機会をなかなか作ってやれないような現状が、現場の中にあるのではないかと思われるのである。

(3)、学習の系統化

国語Ⅰの中では、現代文と古文の両方の指導を行うことが期待されている。そのほか、ジャンル別単元とかテーマごとの単元といった、単元の内容によって、関連を考えていく方法もあるが、これらの関連と併せて、ことばというものを根底において関連づけが考えられるべきではないかと思う。これは私自身としてはまだ漠然としていて、具体的にイメージ化したり、実践の中に取り入れたりすることはできていないが、ことばの学習としての体系、生徒の思考力を養成していく過程での体系というものを自分の中で考えていきたい。

三、実践上の工夫

以上の諸問題を考慮しながら、生徒自身が考えることを中心とする国語学習指導をめざして、具体的実践の中で国語学習ノートの工

夫を行った。この「国語学習ノート」とは、四月当初にファイルの表紙だけを生徒に用意させ、その後の教材、資料を指導者の方で印刷して生徒に配布し、各自ファイルに綴じさせていく、という形のものである。今のところ、三年生二単位の授業をこのノートを使って行い、これ以外の既製のノートは使用していない。

△担当クラス▽

三年生・現代国語(二単位)
文系2クラス 49名、50名
理系2クラス 31名、32名(欠員)

計4クラス

△授業実践上の課題▽

- 1、いかにして「理解」と「表現」を関連づけるか。
- 2、いかにして「ことば」の力をつけさせるか。
- 3、いかにして「自分で考える力」をつけさせるか。

△教材▽

開高 健「パニック」

(第一学習社、現代国語Ⅲ)

△授業展開の計画▽

。時期 一学期後半 全8時間
。展開

1・2時……教科書全文通読(指名読み)

3時……「あらすじ」その他の考察(学習ノート1〜4)

○パニック 開高 健

組	3
番	21
氏名	

1 あらすじをまとめる。(自信が全くありません)

ササなどが発育する後ネズミが大発生するという俊介の調査を局長宛に出したが、課長までいったところ俊介の案は流され、彼はひどく言われた。	課長に呼ばれた。ネズミが山に発生したという。彼は再び注目されることになり、彼自身も対策を考えた。彼と課長のつき合いが始まり、俊介の性格を知ろうとする課長と、課長を深く理解しようとする俊介の会話で終わる。
彼はそれ以来抵抗や不満は言わなかった。秋になり県庁が新築され、また雪どけの早い三月のある日、俊介は新しい	

2 とくに印象深かったところ。

俊介が実際に山で調べて予想をたてた事を、課長・局長は全く相手にしなかったのに、予想が実現すると、彼を頼りにしたことと、彼と同僚の者の彼との対応のし方が、手の平を返した様に違うということ。
。ネズミが発生する前と後との俊介の対応の違い。

3 この作品を読んで感じたこと、あるいは考えたこと。

人間が一所懸命にしていることを、他の者から冷たい目で見られたり無視されたりすると、その人は、そのことはもちろん、他のことでもやる気をなくすという人の心情が改めてわかった。課長をはじめ	めとする俊介をとりまく周りの人々の態度に腹が立った。このような人は、社会に出たら必ずあるのだろうと思った。人とのつきあい方もなんか一段違った方面から見てもまいそだ。
---	--

4 この作品の中で好感の持てる人物と嫌悪を感じる人物について。

(1) 好感の持てる人物⇨ 俊介	理由 俊介にも特に好感を持っているわけではないが、彼が熱心に研究・調査してきたことが無視された時の彼の心情がよくわかるから。
------------------	--

(2) 嫌悪を感じる人物⇨ 俊介の同僚たち

理由 彼らはその日その日の与えられた仕事をなんとかごまかすことだけしか考えていないのに、俊介が出世するかもしれないというわさを聞く不安と嫉妬を感じうわさが実行されなかったら、また友情とは言えない友情をあるやましさをまじった同情で俊介に近づいたから。(本根に
--

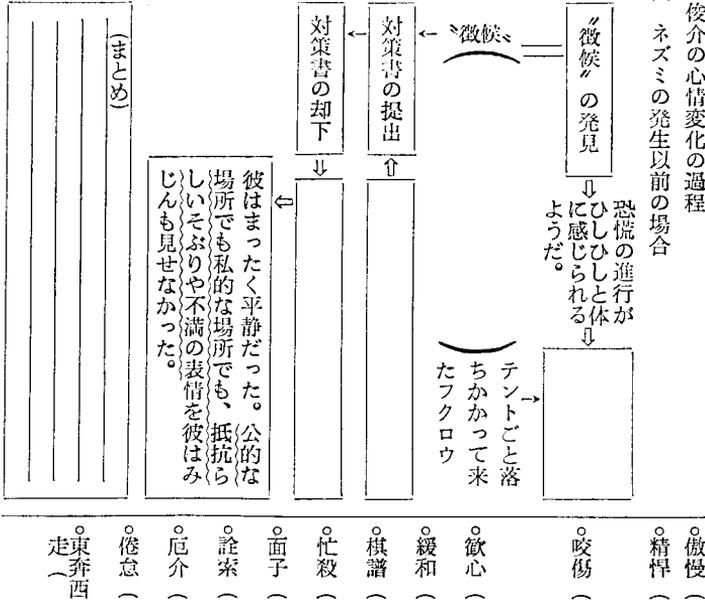
腹が立った

4時……「俊介の心情変化の過程」の考察

(学習ノート6)

6 俊介の心情変化の過程

(1) ネズミの発生以前の場合



(2) ネズミ発生以後の場合

① 対策計画を実施するまで

一枚の風呂敷(あちらこちら穴があいている)

○課長の困惑した顔(いらだちと濁)

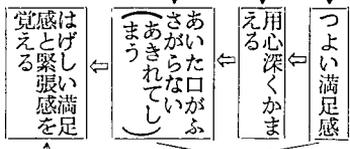
○混乱の表情が薄れる

○課長の責任回避のことは

○対策計画を実施してから

○ネズミの被害の続発

○山林課に殺到する苦情



困惑する

彼の想像力をこえて多頭の怪物と闘っているのだ

※俊介の研究課長への評価

※俊介の山林課長への評価

。俊介の努力の無効
俊介への不信と軽蔑を表明する同僚

憎悪を感じる

。研究課長（農学者）との閑談

・俊介を理解して惜ま
ず資料を提供した。
とつひとつの言葉を考
えている。

（対照的感情）

後悔し、いかにもやまし
い気がする。

自分の浅さを悔いる。

この男なら愛せるかも知
れない。

（まとめ）

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

5時……「表現に関する学習」の考察（学習
ノート7）

7 表現に関する学習

(1) 比喩表現について—比喩と象徴

① 彼がその落葉林で見たものは秋の青空を灑す枯れ枝のこまかいレース模様ではなかった。忘れっぽいモズがあちらこちらの枝につき刺した子ネズミの死骸に彼は眼を奪われたのだった。それは枯れ枝になった、時ならぬ灰色の果実であった。おびただしい数のネズミがひからびて点々と木にぶらさがっていた。（P53上12）

② イタチ、テン、キツネ、フクロウなど、この地方の山野に住むあらゆる肉食性のけものや鳥が灰色の地下組織の攻撃に参加しているはずだった。どの動物も背に冬を感じている気がその貪婪な餌の追ひ方に察しられた。

（P54上13）

③ 新築の庁舎はガラス張りの箱を支柱で地上から持ちあげた、ピロッティ・スタイルの最新設計だったが、その中に住む人間の腐臭のためにネズミは一

。こまかいレース模様（枯れ枝の様子）

。灰色の果実（子ネズミの死骸）

↓象徴

匹も侵入できなかったのである。

(P 57下14)

④ 課長は顔を近よせて小声でいった。

あまりの口臭に俊介は思わず顔をそむけた。そんなことに課長は気がつかず、俊介の耳に生温かい息を吹きこんだ。(P 58下15)

⑤ 課長は彼の答えに安心したらしくそ

ういうと服の襟から妻楊枝をぬきだした。いつもの癖である。この男はいつも食事がすむと、まるで獵師がワナを見て歩くように歯の穴や隙間をシラミつぶしに点検しないではいられないのだ。夢中になって歯をせせり、ときどき妻楊枝を鼻さきへもっていつて軽く匂いをかぐようなしぐさをする。

(P 61上110)

⑥ 部屋のなかには早春の陽ざしがみな

ぎっていた。新式の建物の内部にはまるで影というものがなかった。温室のようにあたたかくて、巨大な窓には日光がいっぱいに射す。血管のすみずみまで透けてしまいうるさな明るさである。

↓象徴

↓象徴

(2) 慣用的な表現について

① ホゴの山になる (P 55上111) 〓すべてが無駄になる。

② 火急を要する (P 55下112) 〓

③ 水に流す (P 56下11) 〓

④ お先走りの空想家 (P 57下114) 〓

⑤ お茶をにごす (P 58上14) 〓

⑥ かさにかかった口調 (P 60上114) 〓

⑦ 棋譜を公開する (P 63下14) 〓

⑧ 人海戦術でやる (P 65上117) 〓

6時……「作品内容の考察」(学習ノート5)
5、作品内容の考察

(1) 俊介の「対策書」に対する人々の反応の変化

研究課長	同僚	山林課長	人物
			ネズミの発生前
↓	↓	↓	ネズミの発生效后

△漢字の学習▽

- 落莫 ()
- 漉す ()
- 微候 ()
- 閃光 ()
- 貪婪 ()
- 災厄 ()
- 狼狽 ()
- 気焰 ()
- 老獯 ()
- 懐柔 ()

- ・ 実績稼ぎ (P 54下)
- ・ 失地回復 (P 57上)
- ・ 老獯ぶる (P 57上)
- ・ 懐柔策 (P 57上)
- ・ 責任回避 (P 60上)

地元の人々
↓

。突飛（

7時……学習のまとめ「主題を考える」

（学習ノート8）

8 主題を考える。

(1) この作品で「ネズミの大群」の持つエネルギー（＝自然の脅威）はどのように描かれているか。

(2) 俊介は「組織（官僚機構）」というものをどのように考えているのか。

(3) 俊介自身はその「組織」の中でどのような生き方を選んだのか。

8時……感想文の作成（学習ノート9）
（家庭学習↓提出）

9 感想文を書く

(1) この作品を通して考えたい問題

(2) 右の問題についての自分の考え

年
3
組
番
氏名

△授業の実際▽

1・2時：声を出して一時間と½時間かけて「パニック」を読み通した。一時間目の終わりに「学習ノート1」のあらすじのまとのプリントを配って次時の作業を予告する。

二時間めに残りを通読し、残った時間であらすじのまとめ方を述べ、課題とする。

通読の際には、できるだけゆっくりと時間をかけて読ませる。しかし、なかなか終わらないので次第に焦りを生じ、生徒の方もだんだん飽きてきて、半分以上の所は速くなってしまふ、ということが反省される。

3時：時間いっぱいかついて、「学習ノート1〜4」をできる範囲でやらせる。速い子、遅い子があるので、残ったところは宿題にして、次の時間に提出させた。

4時：「学習ノート5」はとばして、「学習ノート6」を先に考える。俊介の心情の変化を中心に作品をよませるのがねらいである。「ノート6 (1)ねずみ発生以前」を授業で教師の指導のもとに考え、次に、「(2)ネズミ発生以後の場合」という標題と、「①対策計画を実施するまで」「②対策計画を実施してから」「まとめ」の三つの柱のことは印刷して、そのほかは白紙の状態のプリントを配る。

生徒は、これを自分なりに工夫して書きこみ、教師に提出する。この生徒のプリントに少しつけ加えて、このプリントを生徒に配って、まとめをさせる。

「まとめ」とは、俊介の心情の変化を端的にまとめる、ということであるが、ここは生徒自身が書いていく、という形をとった。

6時：「学習ノート7、表現に関する学習」のプリントで、表現の細かいところへ目を向けさせる。ここで、少しずつ丁寧に読むということさせようとかふうしたつもりであるが、なかなか思うようにいかず、反省点も多い。

7時：「学習ノート5、作品内容の考察」のプリントにかえて、俊介の対策書に対する人々の変化をとらえる。左の方に印刷されている「学習ノート6」の図の中の言葉に注目しながら、人々がどういうふうに応答していったかについて、ことばをおさえながら、細かく読んでいく、という方向をとった。

8時：「学習ノート8、主題を考える」を授業で考えていく。

ここまでの展開での大きなねらいは、表現というものの、言葉というものにできるだけ注目させながら、丁寧に読んでいく努力を生徒自身にさせたい、ということである。これが、私の授業づくりの基本になっている。

9時：実際には、文科系の生徒にだけ感想文を作成して提出するように、という指示をし、授業ではとり扱わなかった。以上が、実際の授業展開の概略である。

四、今後の課題

右のような授業を展開する中で、残されている課題として、次の四点が見出された。

(1) 「ことば」の学習としての国語学習の体系化

生徒がことばを学習していく上での段階づけの必要性を強く感じる。具体的に、一年生はこういう段階、二年生はこういう段階、三

年生はこういう段階、という体系が、まだ自分の中にできあがっていない。小学校の指導要領のような細かい段階は、高等学校の指導要領にはないので、我々は、言葉学習の段階をどうふませていくかという問題を自ら考えていかなければならない。

(2) 生徒に深い思考力をつけさせる学習方法の工夫

生徒に考える力をつけさせるには、そこにねらいを絞った学習を考えねばならないと思う。今までのやり方を脱皮しなければ、考えを深める学習というのはなかなか難しいように思われる。

(3) 少ない時間をより有効に生かせる授業実践

国語Ⅰの実施のされ方を見ると、現代国語と古典とが別々に考えられていて、時間数の上で、現代文で足りない部分を古典の分で補えるなどといった意識があるように思われる。各学年とも、単位として減ってきているので、授業が逆に速くなってしまい、教師の方がどんどん先へ行って、生徒がゆっくり考えていくという時間が、ますますとれなくなっているのではないか、という不安を感じる。

とくに、共通テストを実施して提示する方式の中では、時間数に大きな枷がはめられている。したがって、少ない時間数の中でいかに効果をあげるかという方法が問われているように思う。

(4) 理解と表現相互のより密接な関連をはかる工夫

「学習ノート」は、理解と表現の関連をはかる上で有効な場を提供するものと思われるが、その具体的な方法をもう一度考え直していかねばならない。現状の中で、一番必要であると思われるのは、生徒に自分のことばを持たせる授業のくふうである。特に、はじめ

に述べたような生徒の実態の中で、これをいかに具体的、実践的なものにしていくかが、目下の急務ではないかと痛切に感じさせられるのである。

(広島県立安芸府中高等学校教諭)

(本稿は、当日の提案記録をもとに、編集部でまとめたものである。)